

なみやなぎ

並柳長者と娘の死

昔、並柳に「並柳長者」と呼ばれる一人の長者と美しい娘が住んでいました。長者は多くの新田を開拓し、持ち田が三千町歩もありました。

夜明け前から多くの作人を引き連れて田畑を耕作し月の出を仰ぎながら帰って来るほどの働きぶりで

長者の財産はどんどん増えていきました。

しかし長者は無類のけちん坊でした。

おまけに非情で、人使いが荒いので

使用人や村人からは、あまり慕われていませんでした。

一方、娘は冷酷な父とは反対で

数年前に他界した母親に似て気立ての優しい娘でした。

長者の父には内緒で、貧しくて困っている村人たちに

米と銭を少しずつ分け与えて助け

父の不評判をやわらげ、かばっていました。

ところが「長者屋敷の蔵に夜な夜な怪しい火がとる」

という噂が村中に広まるようになりました。

ある村人は

「隣村に行って、その帰りに夜遅く長者屋敷の前を通ったら

噂の火をみた。」

と言い、またある者は

「夜中に長者の蔵の戸が開いて、淡い光が揺らめいて

俵が浮いて出て行くのを見た。」

とおびえながら話しました。

この噂は長者の耳にも入りました。

そして、その怪しい事が起こるのは

いつも長者が留守の時だということも判りました。

そこで長者は一計を案じ

「ちょっと隣村までいってくる。帰りは遅くなるが

心配なくていいぞ。」

といい、隣村に行くふりをして、暗闇に隠れて蔵を見張る事にしました。

しばらくすると、噂の火があらわれました。

その火はゆらめきながら、蔵の方へと向かっていきました。よく見ると、それは自分の娘と使用人だったのです。

娘は使用人に米俵を担ぎ出させると

いくつかの小さな袋に分け、その中に銭を少し入れました。

そして、どこへともなく持ち去りました。

長者は怪しい火の正体が自分の娘であったことに大変驚きました。

ですが、しばらく考えたあと

あたかも隣村から帰ってきたように振る舞い、

そのまま寝てしまいました。

次の日の朝、長者は娘を自分の部屋に呼びました。

そして、こう言ったのです。

「お前が今までしてきた事は全てわかっている。

いかなる理由があっても

父が汗水流して蓄えた財産を盗み出すとは

もう、親子とはいえない。

明日、隣村の人買いのところへ行け。」

長者は自分の娘を人買いに売ろうとしたのです。

娘は泣きながら

「お許してください。ただ、貧しい人を見るに忍びなかったのです。」

と許しを乞いますが、

ただ財産を蓄えるだけのとりこになっていた長者は

頑として受け付けませんでした。

嘆き悲しんだ娘は、この世に生きる望みをなくし

死んだ母の許に行こうと決心し、白滝川しらたきがわの淵に身を投じてしまいました。

かつて情け深い娘に助けられた人々は

変わり果てた彼女にとりすがって悲しみ、皆で野辺の送りをしました。

しかし、長者は涙一つ流さなければかりか

見向きもしませんでした。

その後、毎晩夜中になると長者屋敷の蔵に

人魂のような怪しい火がともる、との噂が広まりました。

人々は、娘の怨霊ではなからうかと言うようになりました。

長者はそれを信じることなく、はじめは笑っていましたが
使用人が怖がって次々にやめていくので

ある時、本当の事を確かめるため

真夜中に一人で、蔵の前にいってみました。

すると、蔵の戸が音もなく開き

中から灯りをもった娘の亡霊が現れました。

娘は前髪を長くたらし、その表情は深い悲しみを浮かべていました。

それを見た長者は全身の血が抜けたように青ざめ、

その場に座り込み、動けなくなりました。

それからというもの、長者はすっかり気が狂い

夢遊病者のようにふらふらと歩き回るようになりました。

そして、ついには自分の家に火をつけ走り出し

娘が自殺した同じ淵へ身を投じて自らの命を絶ってしまいました。

長者の屋敷は全て灰となり、

蓄えた財産も全てなくなりました。

長者が身を投げたその淵は、底がキラキラ輝いていました。

皆は長者が黄金の粒や銭と一緒に

飛び込んだのだらうと考えましたが

あたりを恐れ誰も手をつけようとはしませんでした。

そして、その淵を『銭が淵』と呼ぶようになったそうです。